真剣で貴女に恋します

ちゃるっぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真剣で貴女に恋します

【Ｎコード】
Ｎ９７２６Ｚ

【作者名】
ちゃるっぷ

【あらすじ】
主人公の名前は川神優誠。名前の通り、川神百代の義弟で川神一子の義兄である。優誠はただただ普通の生活を送っていた。

運命の歯車はどう動き何処へ向かっているのか。これはその過程を描く物語。

第1話　『始まり』（前書き）

勢いで書きました

第1話　『始まり』

『ここら辺じゃな』

当時は武神として世界中から恐れられていた老人がボサッと呟いた。

『そーですな』

辺りを見回しながら、隣にいた目つきの悪い男がだるそうにしている。

それでも川神院師範代という肩書きを持った怪物なのだからすごい。

鉄心を挟んだ隣には同じく師範代のルーも歩いていく。

なぜ世界中の軍隊を敵にまわしてもそれを蚊を叩くように倒していくような怪物がこんな所にいるのか？それには理由があった。

『この子じゃな』

鉄心は目の前にある藁でできた箱に入っている赤ん坊を見た。

鉄心たちは、神奈川県近辺のとある森林に来ていた。

しかしその子の周りには木はおろか草さえもが存在しなかった。

元々そこだけ何も無かったのではない。

火災で燃えた。

伐採された。

台風で飛ばされた。

それでも違う。

地面を境に、地上の物全てが無いのだ。

つまり、そこだけ消滅していたのだ。

『この赤ん坊すげえぁ。気の量が俺をゆうに超えちまってますな』

『この子は気だけでここをこんなにしたのネ』

辺り一面が消滅した理由。

それはその子が気を使い消滅させたからだ。

気だけで物体を消滅されるなんて、釈迦堂はおろか鉄心でさえ出来ないことだろう。

それ程の気を川神院が探知し、その原因を探るというのが、鉄心たちがここに来た理由であった。

『……この子は川神の子として育てる。それで良いかの釈迦堂、ルー』

（この子の親はきっとこの子の気の尋常ではない多さに気が付き、この子を捨てたのじゃろう。しかしそれで子供を捨ててよいという理由にはならん！そんな理不尽な理由で捨てられた不幸な子が目の前にいるんじゃ。それは放っておけるわけあるまい！）

『あぁ』

『えぇ』

鉄心が赤ん坊を箱から取り出す。

『こりゃあなんですかね～』

釈迦堂が文字の書かれた一枚の紙を箱の中から見つけた。

紙に二文字だけ書かれていた。

その文字は、“優誠”

第1話　『始まり』（後書き）

次回は来るのか来ないのか（　～（　）

第2話　『転入生』

『おい川神！　起きろ！』

目が覚めたと思えば、目の前には担任である小島先生が鞭を構えて立っていた。

『すみません』

『うむ。次からは気をつけるようにな』

『はい』

小島先生は教卓へ戻って行った。

すると隣の席の親友である直江大和が声をかけてきた。

『おいおいどうしたんだ？』

『何か眠くてな～』

それに合わせるかのように、義理の妹である川神一子と自称大和の妻であり天下五弓の一人である椎名京が話かけてきた。

『優兄大丈夫？』

『このサンドイッチ食べる？』

『大丈夫だ。ありがとな一子。それと京のそれは食べ物という部類

に分類されるのか？』

京が差し出したサンドイッチは、真っ赤のパンに真っ赤な野菜と真っ赤な肉を挟んでいて、まだ1メートル近く離れているのに鼻孔が痛く目からは涙が垂れて来るような物であり、もはやもう一歩で劇物指定されてしまいそうな物だ。

『失礼な。ほらワン子アーン』

すると一子は大きな口を開けて劇物を口に含んだ。

『…………………カッラァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ〜』

すると一子は口から火を吐いた。

勿論比喩的な表現ではなくな。

目からは大量の涙が出ていた。

『ふふひひ〜ひははひひひひふふほ〜』

因みに今のを日本語訳すると、“優兄〜舌がヒリヒリするよ〜”だと思う。

『お前たち！今は朝のホームルーム中だぞ！寝るな話すな食うな！』

小島先生が鞭を床に振ってそういった。

『まったくお前たちは…………それではお待ちかね転入生を紹介

するぞ』

ザワザワと教室がざわめく。

『入りたまえ』

すると教室のドアが静かに開いた。

そして入ってきたのは…

『グーテンモルゲン』

軍服を着た、どこからどうみても５０はいっているであろうオジサンだった。

教室が更に騒がしくなった。

『え？あの人が転入生だっていうの？』

『ちょっと老けてる感がないなしら？』

一子がボサッと呟いた。

『そこが問題じゃねーよ』

と言うのは大和の幼なじみであり俺の親友？である島津岳人だ。

『こらぁ身体的特徴を指摘してはいけません！』

『突っ込むところが違う違う。転入生そのものが突っ込める塊でしょーが』

『ツッコムとかエロッ！勃っているだけに席から立てん！』

『こんなオッサン補強してどーすんだ？』

辺りがざわつく中、優誠が驚きの声を上げた。

『ってフランク中将！！』

『おぉ優誠君じゃないか。３年ぶりだね』

ｂｅｆｏｒｅ３年

三年前、優誠は趣味の旅行で世界各地を回っていた。

その時行った内の一カ所が西アジアである。

優誠は西アジアの草原を突っ走っていた。そこで、急に地上に大きな影が出来た。

ａｔ優誠から１キロ程北の場所

『猟犬！テメェと殺り合うのは何度目かねぇ』

小太刀を持った少女が赤髪のトンファーを持った少女に話かける。

『女王蜂。そのくらい自分で覚えていなさい。クリスお嬢様、後ろへ』

マルギッテは隣にいたクリスを優しく後ろに下げた。

『はぁぁぁ～』

小太刀がマルギッテの喉のあった場所を通過する。

マルギッテはそれをギリギリでかわす。

『ふっ！』

そしてかわしながらトンファーをあずみの顎を目掛けて振り上げた。

あずみはそれを一歩後ろへ下がることでかわした。

（猟犬……腕は衰えてねーな）

（女王蜂……やはりやりますね）

（（力も速さも同じ…なら！））

両者が後ろに下がり間合いを取り直した。

（（体力勝負！））

取り直した間合いを一瞬で詰めて斬撃と打撃の撃ち合いが始まった。

『くたばりなさい！』

『お前がくたばればいいだろ！』

その撃ち合いが15分を過ぎた頃、大地が突如影で覆われた。

『マルさん！上！』

『あれは……』

『ミサイルだな……どうやらあのクソ大尉がミサイルぶっ放したらしい。ありゃ半径5キロは消滅する……こりゃ終わったな』

あずみが呟いた。

そして、幾度も危機を乗り越えて来たマルギッテでさえもこれは諦めるしかなかった。

『クリスお嬢様、申し訳ありません。私の力量が不十分だったばかりにお嬢様まで……』

『いいんだマルさん。これは父様でさえどうしようもないさ』

優誠はその影がミサイルだと分かったら直ぐさまにミサイルへ向かって移動しようとした。

（我流、気爆）

優誠の足元に気を集中させて限界まで収縮する。

そしてそれを爆発させる。

光速に等しい速度で移動すると、そこへ着くのには１００００分の１秒さえかからなかった。

『川神流究極奥義、七福神！』

すると刹那、虚空に毘沙門天、大黒天、弁財天、布袋、寿老人、福禄寿、恵比寿…七福神といわれる七体の神が現れた。

といっても本当の神ではなく、気で創った神である。

それでも神の力の一部を得られるので世の中にある技の中では最難関であるために、川神院では優誠以外には使えない。

鉄心は七体の内どれか一体だけを選んで出すことは出来るが、七体同時に出すには気の量が不足しているため出来ないのだ。

その七体の気で出来た神がミサイルを防いだ。

するとミサイルは空中で爆発した。

爆発の衝撃は疎か、破片の一つすら地上には届かない。

しかも七体の神には傷一つ付いていない。

『ふ～ギリギリ間に合ったぜ』

優誠は両手を上に上げて背筋を伸ばした。

『おいっ』

急にドスの効いた声が後ろから聞こえた。

優誠は後ろに振り返る。

優誠の目の前には、こんな戦地にはいるとはとても思えない美少女三人が立っていた。

『なんだ？』

『まずは助けてくれた礼を言う。流石にあれはアタイも諦めた』

少女はあたかも生まれて始めてしたかのようなぎこちない動きで頭を下げた。

『私も感謝する。光栄に思いなさい』

『自分もだ。ありがとう』

後の二人も頭を下げてきた。

『別にいいって。あれは俺が自分の身を守るためにしたことだから

な』

『お前、名は？』

向けられた視線が優誠の目に合う。

『川神優誠だ』

『川神……川神院か。

総代を超えた力を持った孫がいるというのは本当だったんだな』

少女は一人で勝手に納得した。

『あぁ俺は優誠って呼んでくれ。それでお前たちは？』

『アタイは忍足あずみだ。あずみで良い』

『私はマルギッテ・エーベルバッハ。マルギッテと呼ぶことを許可します。光栄に思いなさい』

胸を張ったために、胸の大きさが強調された。

『自分はクリスティアーネ・フリードリヒだ。クリスと呼んでくれ』

三人共に軍人であるためか、軍服を着ている。

『分かった。それで、あのヘリはなんだ？』

優誠は物凄いスピードでこちらへ向かって来るヘリを指差した。

『ドイツ軍か……じゃあアタイはここらでずらかるぜ。』

あずみがヘリの進行方向とは逆に向けて走り出すが、少し離れた所で振り向いた。

『優誠！アタイは借りを作るのが嫌いなんだ。だから何かあったらアタイに言え』

あずみは顔を少し赤くしてそう言った。

『あぁ。その時は頼んだ』

返事を聞いたことに満足してか、数秒後にはあずみの姿はもう見えなくなっていた。

ｓｉｄｅあずみ

（優誠…か）

アタイは今までの戦いで負けたことは一度もなかった。

だから自分よりも強い者に会ったことも無かった。

さっきミサイルがこっちに飛んできた時は本当に終わったと思ったんだ。

普通に考えてあれを回避できる奴なんかがいるわけが無かった。

優誠はそれを楽々と防いだ。

アタイは始めて人に守られた。

それも異性に。

それを意識するなというほうが難しい。

優誠はアタイの命の恩人であるとともに“初恋”の相手ともなった。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

それをしばらく見ていたら、いつの間にかヘリが着陸をしていた。

バンッと大きな音を立てて扉が勢いよく開いた。

『クリス！大丈夫かい』

そのヘリから出てきてクリスへ駆け寄ったのは、胸にいくつものバッチを付けた男だった。

（誰だ？）

『はい！父様！優誠……この方が守ってくださいましたので』

『中将この方が川神の例の……』

マルギッテがクリスの父の耳元で何かを囁いていたが、優誠からは何も聞こえなかった。

『優誠君、娘と少佐を助けてくれてありがとう。私はフランク・フリードリヒ、クリスの父でドイツ軍の中将をしている』

『いえ、それ程でもありません』

『ところでだ優誠君。突然で悪いんだがドイツ軍に入っては貰えないかね？』

話を聞くと、どうやらドイツ軍はこれから某社会主義国から脱走したグループを捕まえる任務を遂行しているのだが、そのグループが調査していたより数十倍もの力を持っていて太刀打ち出来ないそうだ。

それでクリスとマルギッテを探していたら爆発があったので急いでここに向かったという経緯らしい。

『ではクリスとマルギッテも戦場にいくのですか！？』

『当たり前だよ。本当はクリスを行かせたくないんだが私も一軍人だからね、身内だからといって差別することは出来ないし彼女たちも望んでないだろう』

『では今回の様に危険な場合だけヘルプするっていうことでどうで

すか？クリスやマルギッテの様な女の子をそんな危険な場所で戦わせる訳にはいきません！』

優誠は軍人とか関係なく、女の子が危険な戦場に行き戦うということが気にくわなかった。

クリスとマルギッテはその言葉に連鎖するように顔を赤らめた。

『いやいや十分だよ。優誠君、何か有ったらこの番号に連絡してくれ。私に協力してくれるということは、私もそれなりの代価を支払うよ』

クリスの父は胸ポケットから紙とペンを取り出して番号をスラスラと書き優誠に渡した。

ｓｉｄｅマルギッテ

中将が優誠を軍に誘ったことには正直驚いた。

優誠ほどの実力の持ち主ならば、軍に入ること自体にはなんの問題も無い。

しかし優誠がそれを受けるとは到底思わなかった。

けれど優誠は、ピンチの時に限りという条件で引き受けた。

その理由が私が“女の子”だからときた。

今思えば、私が最後に女の子として扱われたのはいつのことだろう。
軍人になると決心した時点でそんなことを捨てたのかもしれない。
（女の子…か）
彼のその一言が私の中の何かを目覚めさせた。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

余談だが、優誠は翌日その数百人もの戦力を持ったグループを一人で一分足らずで壊滅させた。
ｅｎｄ

『はい！それでクリスは？』
『あぁそれなら、間もなく駆けて参りましょう』
オジサンが指差した先、窓に視線が集中した。
『グラウンドを見てみるがいい』

『パカラッパカラッパカラッ……』

グラウンドを見てみると、馬に乗って校庭のど真ん中を走り抜けている女の子がいた。

『……げっ！』

『どうした優誠？何が見えるんだ？』

『馬かよ！！』

『はっ？なんだそりゃ！』

皆が教室の窓にザワザワと群がってきた。

『うん。確かに乗り込んできたねぇ……馬で』

と言ったのは友人の籾岡卓也、特徴がないのが特徴だ。

すると急に校庭から声が聞こえてきた。

『クリスティアーネ・フリードリヒ、ドイツ・リューベックより推参！』

『この寺子屋で今より世話になる！』

馬に乗り、風にたなびく金髪が美しい。

『おぉぉ金髪さん！可愛くね、マジ可愛くね！』

『超当たりなんですけどぉぉぉぉぉぉ！』
乗り込んできた美少女を目にし、ヨンパチと岳人を初めとする男子たちが咆哮した。
『だっはっはっ馬かよ！面白れぇ、あいつ面白れぇ』
一番テンションの高い少年は風間翔一、優誠も入っている風間ファミリーのリーダーだ。
『うわ…これはもう完全に負けたわ……でも馬って』
『日本では馬は交通の手段だろう？』
クリスの父が不思議そうに尋ねた。
『や…あの…道路とか見ましたよね？』
『自動車が多かった。だがテレビでは馬も走っている』
『あの…それは時代劇だと思うんですが？』
『おぉ。あれはまさか……』
『…！。うわ～よりによって例外が！』
窓の外を真剣な眼差し見てそう言った。
『フハハ！転入生が朝から馬で登校とはやるな！』
『おはようございますっ☆』

その人力車を引いているメイドの忍足あずみも挨拶をしてきた。

『それは……ジンリキシャ！』

時代劇でしか見たことのない物を実際に目の当たりにしてクリスは感激した。

『うむ。そして我はヒーロー。九鬼英雄である！』

『自分はクリス！馬上にて御免』

クリスが馬の上で軽く頭を下げた。

『我が名は九鬼英雄！いずれ世界を統べる者だ！』

『この栄光の印、その目に焼け付けるが良い！』

『おぉ、まるで遠山！』

『人力車で登校の生徒もいるとは、では当然義の心を重んじる侍もいるのだろ？』

クリスの父は教室をジロリと見回して、意味の分からない理屈を述べた。

しかしながら教室から返事は無い。

教室にしばし沈黙が流れた。
だが、そんな沈黙を破った勇者がいた。
『はい！』
（ナイス大和！）
『川神優誠がそうです！』
『確かに優誠君ならば納得だ。なぜ気がつかなかったのだろう？』
『おい大和！なんで俺が！』
『剣聖黛十一段に5秒で勝ったのは誰だったっけ？』
『あれはオッチャンが油断していたから出来たんだ！』
『そうだとしても、このクラスで刀を使えるのはお前くらいだろ』
優誠は辺りを見回して納得した。
『……まぁそうだな』
『ではクリス！』
『はいっ！』

いつの間にか教室まで来ていたクリスが元気良く返事をした。

『この優誠君と戦いたまえ』

『はいっ！ってえ～優誠！？3年ぶりじゃないか！』

『そうだな。いきなりで悪いんだが、何かお前と戦わなくちゃいけなくなったらしい』

『優兄いいな～私も戦いたいわ～！』

一子が羨望の眼差しで優誠を見つめていた。

『決闘ということでよろしいですね？』

小島先生が確認を取った。

『あぁ』

『パチッ』

優誠が床にワッペンを落とした。

それを見てクリスは何をどうすればいいのか迷っているようだ。

『お前のワッペンを上に重ねれば良いんだ。決闘をする前にやる儀式みたいなもんだ』

『こうか？』

クリスはぎこちなくもその上にワッペンを重ねた。

『ではこのレプリカの中から武器を選べ、ほら川神も』

小島先生はそう言い残して教室を去った。

おそらく学園長の所に許可を取りに行ったのだろう。

クリスはレイピアを取った。

『じゃあ行くぞ！』

優誠は日本刀を持って廊下に一歩踏み出した。

第2話　『転入生』（後書き）

感想お願いします！

作者のもう一つの作品、『とある副会長の転生物語　～緋弾のアリア編～』もよろしくお願いします。

次回は来るのか……？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9726z/

真剣で貴女に恋します

2012年1月4日01時47分発行